

第5回市史講座ミニレポート：平成30年8月18日（土）

「弥生時代史にみる東アジアとの交流」

松本岩雄先生（八雲立つ風土記の丘所長）



今回の講座では、「弥生時代史にみる東アジアとの交流」というテーマで、弥生時代の島根県周辺と東アジア地域の状況を、資料や現地での見聞を交えてお話しいただきました。

弥生時代の区分について、まず、縄文時代→弥生時代→古墳時代という流れを紹介されました。これまでは、縄文時代の狩猟採集に灌漑水田稲作が導入され、弥生時代が始まった、と考えられていました。しかし、日本列島では地域ごとに多様なあり方が見られ、縄文時代でも、一部で粟・イモなどと一緒に米の栽培も行われていたそうです。例として、福岡県の板付遺跡で縄文晩期式土器と水田跡が同時に出土したことを挙げられました。

また、縄文時代の農耕は多角的経営を行っていたとは考えにくく、灌漑水田稲作の導入により集団がまとまり、階級を発生させ、初期国家を成立する契機となったとの見方を示されました。

次に、当時の日本列島に関する文献として、『漢書』地理志、『後漢書』東夷伝、『三国志』魏書東夷伝倭人条など古代中国の歴史書を紹介されました。これらの記述を元に遺跡・遺物の年代推定が行われています。有名な例として、志賀島出土の金印や「卑弥呼の鏡」として知られる「景初三年」の鏡などがあります。

かつて島根県の考古学研究においては、『新修島根県史』（昭和 43 年）の記述等に見られるように、海外の先進文化との直接交渉の証跡はないとされていました。しかし、「出雲原山遺跡の再検討」（昭和 54 年）で朝鮮の無文土器の存在が指摘され、その後、徐々に新たな事実が発見されるようになったそうです。

西川津のタテチョウ遺跡からは、縄文晩期の土器とともに朝鮮半島南部で見られる孔列文土器が出土しており、九州でも同じ例が見られることから、縄文晩期には朝鮮半島との交流が広く存在したと考えられるそうです。

鹿島町の堀部第 1 遺跡と古浦砂丘遺跡では、韓国の松菊里式土器が弥生前期の土器と一緒に出土しています。出雲市大社町の原山遺跡と松江市西川津の布田遺跡でも、韓国の水石里式土器（円形粘土帯土器）が出土しました。

韓国の靑島（ヌクト、古代の弁韓諸国の地域にある島）では、九州の弥生中期の土器、楽浪郡の土器、中国の銭と一緒に出土しており、貿易拠点だったのではないかと考えられるそうです。この靑島の土器は出雲市の山持遺跡からも出土しており、九州北部から山口・島根（出雲地域）への分布が見られるそうです。

一方、出雲地方と楽浪郡（現在の平壤周辺）との繋がりもみられました。九州北部と出雲地域で楽浪郡の土器などが見られることから、（１）楽浪郡との直接交流、（２）中継地を経由、という二つの説があるそうです。土器の移動については、（１）土器の作成者が運んだ、（２）交易者が運んだ、（３）地元の人が持ち込んだ、（４）地元の人が他地域の土器を真似て作った、など様々な説があり、より詳しく検討する必要があるそうです。

また、大陸との交易品として、田和山遺跡出土の石片を紹介され、東京大学と東京国立博物館所蔵資料との比較結果から、これが楽浪郡の硯である可能性を指摘されました。この石片と同様のものが九州の糸島市、韓国の靑島の出土品でも見られました。糸島市は魏志にみえる「伊都国」の所在地と推定され、中継地を介して交易があった可能性を述べられました。

この他、中国王朝の「新」で作成された貨泉が出雲市の中清水遺跡から出土しています。新は紀元前 1 世紀の短期間しか存続していないことから、遺物の制作年代が分かる貴重な例となります。

さらに、階級の成立を考える上で重要な出雲市の西谷墳墓群を挙げられました。この遺跡の埋葬遺構からは大量の水銀朱が出土しており、三号墳には 4cm にわたる朱の層ができていたそうです。これらは中国の朱の成分に酷似していることが分かりました。当時の朱の価値を検討したところ、「生口（奴隷と推定）10 人分」にも及ぶそうです。この他、ローマ帝国内で生産された硝子の管玉、朝鮮半島産鉄製剣がもたらされていたことが分かってきました。こうしたものを入手できる財力を持った有力階級が成立していたことが分かります。

出雲での鉄製品の出土は弥生中期後半から見られるそうですが、弥生後期からは素材を入手して加工し鉄製品を生産していました。これらの素材は朝鮮半島南部からの輸入品と考えられるそうです。

古浦砂丘遺跡出土の人骨からは、縄文時代人とは異なる特徴を有する集団が来ていたことが分かり、堀部第 1 遺跡の墓の作り方でも渡来人の影響が見られます。これらの墓では女性・子どもの骨もみられ、集団での移住であったことが考えられます。

出雲地方と大陸との交易ルートとしては、楽浪郡-靑島-沓岐-博多-日本海沿岸のルートがあり、他にも複数のルートがありました。他地域の土器などが見られなくなった時期にも出雲地域の土器は流通されていたことから、出雲地域はかなり重要性を持っていた可能性が考えられる、とされました。

最後に松本先生は、対外交流を示す証拠はかつて皆無とされていたが、現在ではかなり多く発見されており、これらの出土資料を紹介し伝えるのがこの講座の意義であると述べられました。